

## 主要な遺物

### D 壺形土器-つぼがたどき- 高杯-たかつき- (弥生時代終末期)



壺形土器2点は同じ溝から発見されました。装飾は大変簡素な印象を受けます。高杯は近くにあった別の溝から発見されました。高杯の方が壺形土器より少し時期が新しい型式です。

### E 手焙形土器-てあぶりがたどき- (弥生時代終末期)



溝から2点発見されました。おそらくどこかから転がり込んだものと推測されます。「手焙」とは、近世以降の個人用火鉢(ひばち)の名称に因んでいます。弥生時代でも使用目的が同じかどうかは未解明ですが、中にススがつくことがあるので、土器の中で火を維持した可能性が指摘されています。

この土器は弥生時代終末期(紀元後2世紀頃)の大阪府と滋賀県を中心に多く見られます。愛知県にはそれほど多くないですが、朝日遺跡や廻間遺跡(清須市)、欠山遺跡(豊川市)では複数点の出土が報告されており、時期も同じです。

## 安城市小川町五反田遺跡の調査

鹿乗川の河川改修工事に伴って、地下に埋蔵されている文化財を記録・保存する必要が生じました。愛知県埋蔵文化財センターでは、愛知県教育委員会の依頼を受けて、今年7月から10月までの予定で発掘調査をしています。まだ調査・検討が及んでいない部分もありますが、今日はその成果の一端を皆様にお知らせします。

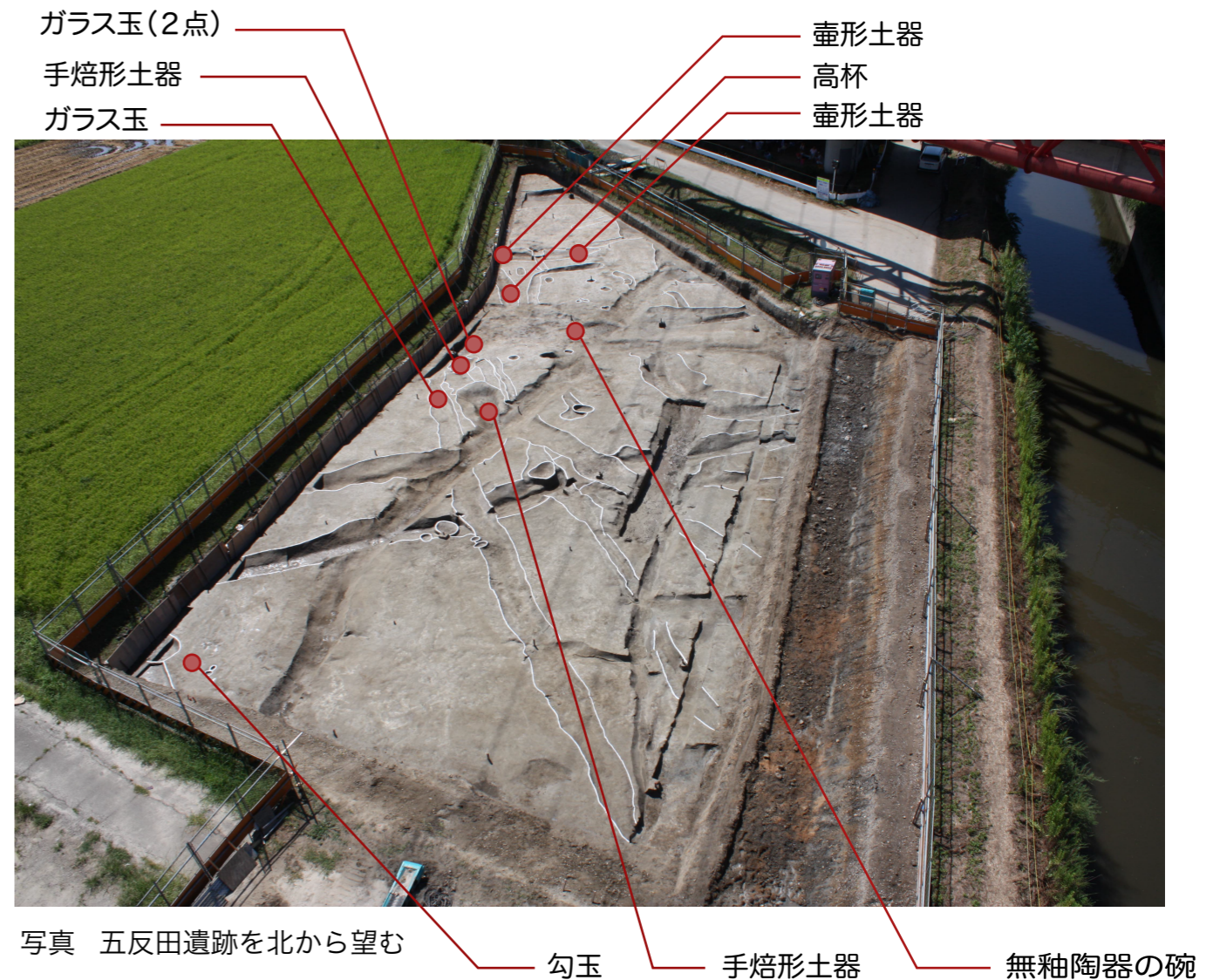


写真 五反田遺跡を北から望む

主要な遺物の出土位置

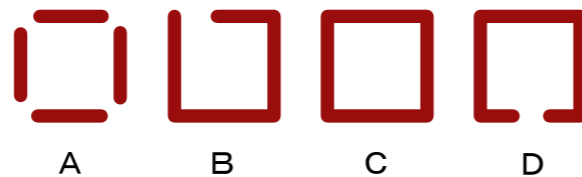
2010年9月12日(日)  
五反田遺跡地元説明会 配布資料  
愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター  
支援業者 日本海航測株式会社

### ◆ 方形周溝墓-ほうけいしゅうこうぼ- ◆

弥生時代前期末(紀元前4世紀頃)から古墳時代にかけて作られていた墓で、周囲に溝を巡らし、真ん中に土を盛り上げて出来ています。上から見ると方形になります。

方形周溝墓は複数が集まって墓地(墓域)を構成するのが普通ですが、隣り合う墓同士で同じ溝を共有している場合もあります。大事なのは溝ではなく、死者を埋葬し、品物を副(そ)えて、土を盛り上げた方形の中央部(墳丘)だからでしょう。五反田遺跡では残念ながらそうした墳丘は確認できませんでした。

弥生時代において墓域と居住域とはセット関係にありました。セットでひとつの「集落」を構成したのです。五反田遺跡が墓域であるとすれば、近くにそれとセットになる居住域があったに違いありません。



方形周溝墓の諸形態

### ～これからの調査～

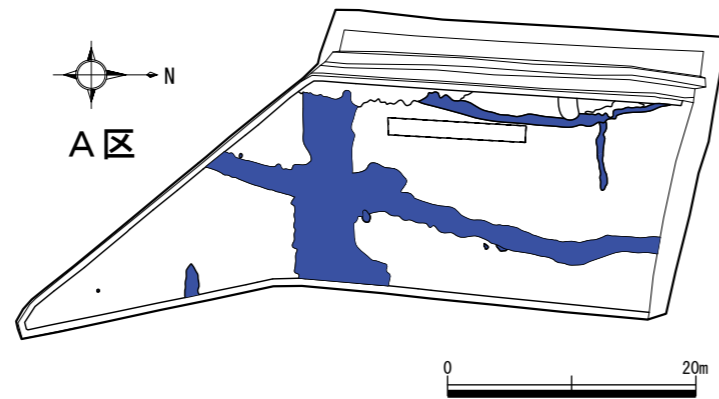
調査はもう終盤です。これより下層では、弥生時代中期(紀元前4世紀～紀元後1世紀頃)の遺構・遺物が期待されます。気になる方はまた来跡下さい。お待ち申し上げます。

## 遺構の帰属する時代

五反田遺跡では現時点で3つの時期の遺構が重なっていることがわかりました。

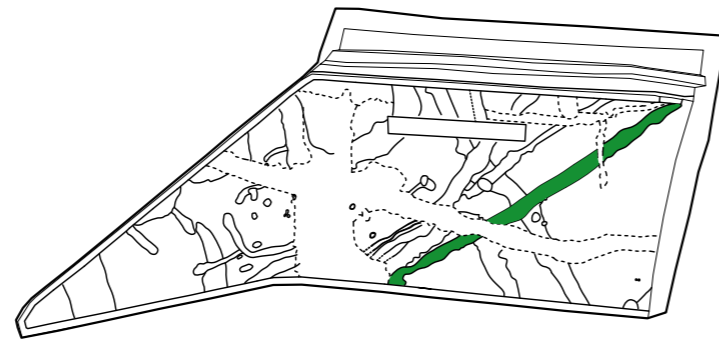
### 1 近世以降（16世紀後半～）

溝（みぞ）が発見されました。どのようにして使用されたものかはわかりませんが、この時期には付近に集落が存在し、既に水田が営まれていた可能性が高いので、生活用水か灌漑用水に関係するものと推測できます。



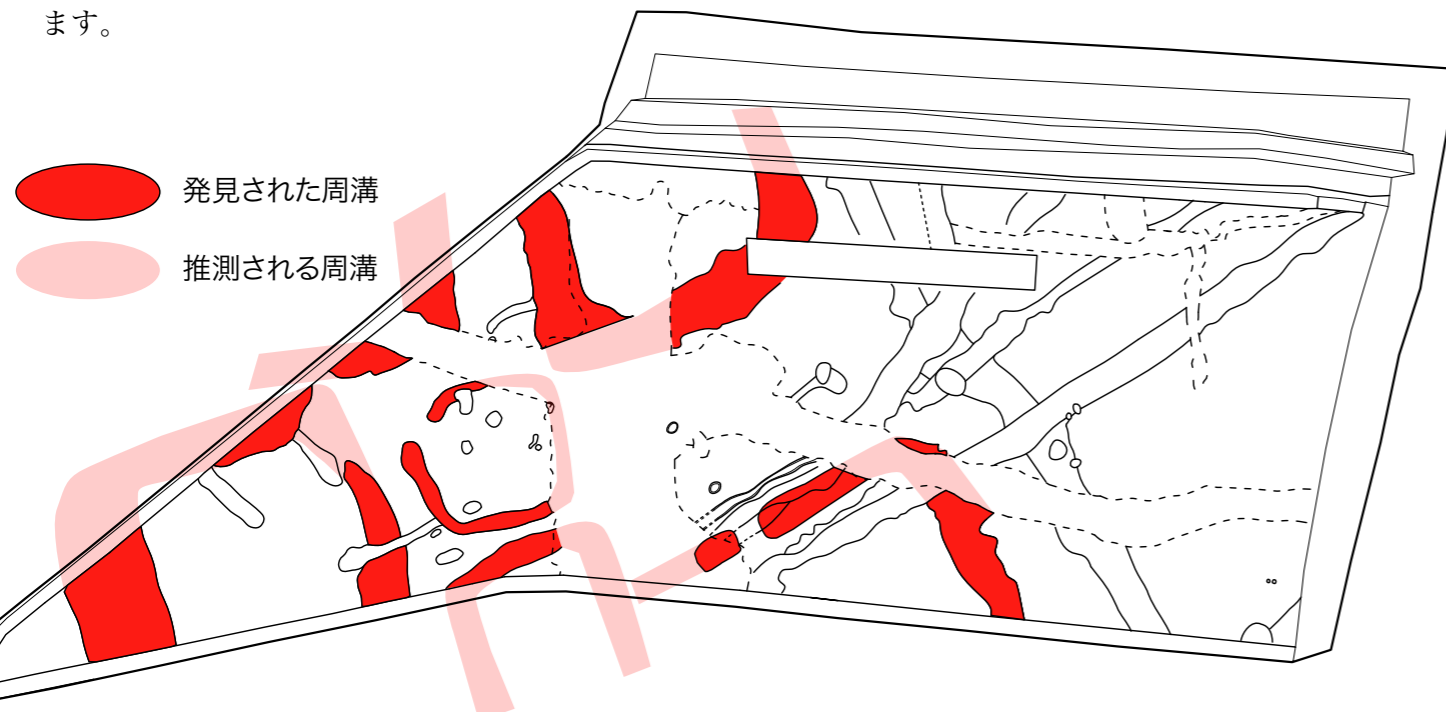
### 2 中世前期（13世紀中頃～）

溝が発見されました。これもどのようにして使用されたのかはわかりませんが、やはり生活用水か灌漑用水に関連したものと推測できます。



### 3 弥生時代終末期～古墳時代初頭（紀元後2～3世紀中頃）

溝と坑（あな）が発見されました。溝は方形周溝墓（ほうけいしゅうこうぼ）の一部と推定しています。方形周溝墓に埋葬された人骨や副葬品はハッキリしませんでした。溝の中や周辺から発見された、ガラス玉、勾玉、壺形土器、手焙形土器は互いに時期が近いので、墓に関連する可能性のある遺物とも推測できます。



## 主要な遺物

いまのところ数百点の遺物が発見されています。なかでも特徴のある遺物を紹介します。

### A 無釉陶器の碗-むゆうとうきのわん-（中世前期）

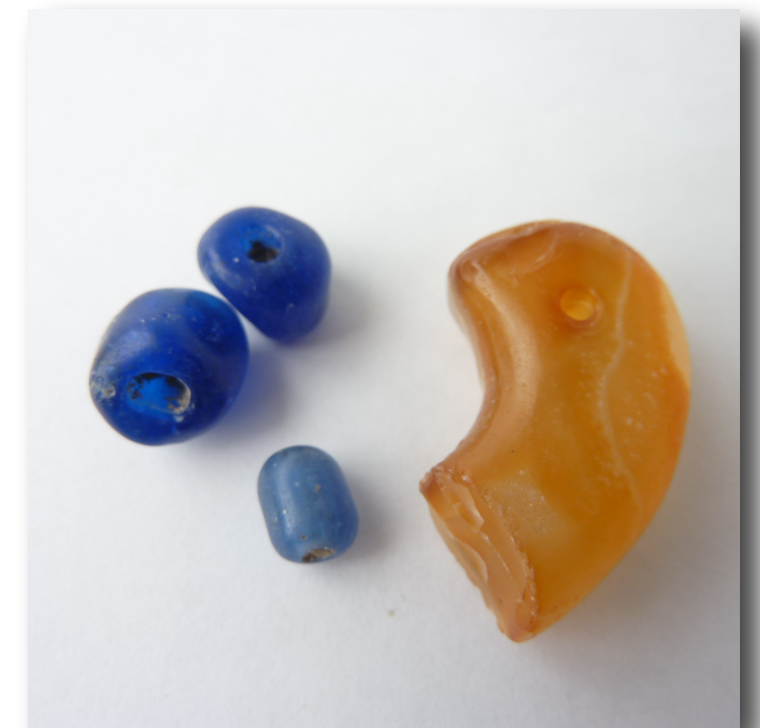
溝や包含層から破片が数十点発見されました。底部から口縁への立ち上がりの角度や胎土の様子からすると13世紀中頃の瀬戸窯のものと推測されます。中世の東海地方西部では、釉薬を施さない表面の粗っぽい陶器が沢山作られました。この碗は集落遺跡を始め非常に多くの遺跡で出土するので、主に一般民衆が使ったものと考えられています。



### B ガラス玉-がらすだま-（弥生時代終末期～古墳時代初頭）

溝から3点発見されました。紐を通した飾り物の部品と推測され、本来はもっと沢山と組み合わせられていたと思われます。朝日遺跡（清須市）や烏帽子遺跡（東海市）、八王子遺跡（一宮市）では方形周溝墓の副葬品等として複数見つかりました。なお、愛知県では1遺跡で数点から数十点程度出土していますが、北部九州では数百点から数千点も出土することがあります。

日本のガラスは弥生時代になってから朝鮮半島から伝えられたと考えられています。弥生時代のガラスを色調で見ると、銅イオンで着色された淡青色と、コバルトイオンで着色された青紺色という2種類が代表的です（淡緑色もあります）。九州北部ではこのふたつがほぼ1：1でみられ、近畿以東では4：1の割合で淡青色が多いといわれています。五反田遺跡の3点はいずれも青紺色ですから、地域的には珍しい少数派といえます。西方との何らかの関係を示すのかもしれませんが。



### C 勾玉-まがたま-（時期不明）

包含層から1点発見されました。先端は壊れています。孔（あな）に紐を通す飾り物の部品と推測されます。原材料はおそらく瑪瑙（めのう）でしょう。勾玉は縄文時代の珧状耳飾り（けつじょうみみかざり）を祖形とする装飾品といわれ、次第に変化しながら弥生時代に継承されたようです。勾玉は瑪瑙のほか翡翠（ひすい）やガラスで製作されることもあります。